

昭和14年度邦文天文書一覽

水 野 千 里

昭和14年中に新に午にした邦文天文書について、短評を試みやう。

番 號	書 名	著 譯 者	冊 數	頁 數	定 價	出 版 年 月 日	發 行 所
1	曆の天文記事の見方	近 藤 芳 一	1	154	Y0.80	昭和 9 VIII 3	大 日 社
2	日本古曆の教訓	〃	1	263	2.50	〃 13 I 15	〃
3	天文學名詞	天文用語審議會	1	48	0.70	〃 〃 V 18	大 阪 支 部
4	最新月面圖	大 阪 支 部	1	PL. 1-8 34 p.	0.85	〃 〃 XII 5	東 光 社
5	支那古代史と天文學	文 博 飯 島 忠 夫	1	333	3.60	〃 14 II 14	恒 星 社
6	眼視變光星觀測論	木 小 邊 成 秋	1	48	0.50	〃 〃 〃 20	大 阪 支 部
7	日本天文學會要報	日本天文學會	#21	52	1.50	〃 〃 III 25	日本天文學會
8	天文曆法と陰陽五行説	文 博 飯 島 忠 夫	1	354	4.20	〃 〃 V 19	恒 星 社
9	舊約の天文學	森 川 光 郎	1	256	1.50	〃 〃 VI 1	教 文 館
10	天文常識星の話	原 口 氏 雄	1	136	0.50	〃 〃 VII 10	天 美 社
11	宇宙の實相	相 田 八 之 助	1	141	1.80	〃 〃 〃 16	恒 星 社
12	新裝版星座カ本ド	野 尻 抱 影	1	PL. 1-22	0.50	〃 〃 XI 5	研 究 社

1. 曆の天文記事の見方 第一篇時節及時刻並方位に關する記事の見方、第二篇年月日時並方位の干支に關する記事の見方、第三篇朔及望並兩弦に關する記事の見方、第四篇補遺一時節相關によりて長期の天候を豫知する法を述べてある。著者の抱負は新舊兩曆の天文記事の見方を説明し、舊曆の天文記事が新曆のそれに優つて居ることを明かにされたものである。尙ほ著者は皇漢醫道の基本としての天文道の科學的解説であるとの大氣焰である。

2. 日本古曆の教訓 本書にいふ古曆とは貞享二年曆より、明治六年の太陰陽曆に至るまでの頒曆を意味し、それ以前の頒曆を意味しない。蓋し貞享二年曆より明治六年の太陰陽曆に至るまでの頒曆は我邦に於ける實測に基いて造つたものであるが、それ以前の頒曆は支那の曆法をそのまま採用して造つたものであつて、日本古曆といふにふさはしくないからであると斷つてある。その目次は次の通りである。緒論、第一章曆の意義及種類、第二章日本古曆の本質、第三章參考書、第一篇干支の眞意義、第二篇方位の吉凶の眞意義、第三篇日時の吉凶の眞意義、第四篇 定所の吉凶に就いて、第五篇 二十八宿及七曜に就いて、結論。

3. 天文學名詞 中華民國(支那)の國立編譯館に於て、昭和 8 年に天文學名詞審查委員會を設けて、天文用語を討論審議し、其の決定を經めて 1 冊として

出版したもので、イギリス名、ドイツ名、フランス名、日本名、支那名が掲げられてゐる。そのうち88星座中約60がある。我が國と同名のものもあるが、異つたものを少々掲げやう：アンドロメ(仙女)、ジラフ(鹿豹)、山羊(摩羯座)、カシオペヤ(仙后)、センチウル(半人馬)、セフェウス(仙王)、カメレオン(蜥蜴)鳥(烏鴉)、コブ(巨爵)、白鳥(天鵝)、旗魚(劍魚)、龍(天龍)、海蛇(長蛇)、狼(豺狼)、山猫(天貓)、テーブル山(山案)、一角獸(麒麟)、八分儀(南極)、オリオン(獵戶)、ペルセウス(英仙)、レチクル(網罟)、彫刻刺(玉夫)、巨嘴鳥(杜鵑)、狐(狐狸)。

4. 最新月面圖 月面の高低圖、月面の色相、月面圖6枚、3日月—14日月の圖、月面索引表、月面邦譯名詞、月の恒數表等から出來て居て、座右に必要な月面圖である。

5. 支那古代史と天文學 本書は支那古代の天文學と、それを通して見た古代史の批評的研究とに關した論文で、飯島博士の力著である。目次は、一、支那天文學の組織及び其起原、二、支那古代史と占星術、三、支那印度の木星紀年法の起原、四、支那天文學者の成立に就いて(新城博士の駁論に答へる)、五、支那上古史の紀年に就いて、六、三皇五帝に就いて、七、堯典の四中星に就いて、八、殷墟文字の年代、九、橋本氏の十千十二支考を讀む、十、三國史記の日食記事に就いて、十一、Western Influence on the Ancient Civilization of China Completion of the Confucian Classics.

6. 眼視變光星觀測論 日次下記の通り、變光星觀測者の必携書である。變光星の話—故小山秋雄、1. 變光星の定義、2. 變光星の命名、3. 變光星の分類、眼視變光星觀測論—木邊成啓、1. はしがき、2. ユリウス通日、3. 觀測法、4. 光度の算出、5. 觀測上の注意、6. 望遠鏡使用上の手引、7. 記録の仕方、8. 保存記録、9. 報告、10. 整理、11. 觀測案内、星の撰擇、12. 結び。

7. 日本天文學會要報 第21號 富士山の觀測報告、本邦に於ける中心食(1)小惑星の一般攝動論について、日本天文學會員の1938年流星の觀測、同會員の變光星の觀測(1938、1939年)等の論文や觀測報告である。

8. 天文曆法と陰陽五行説 支那學術の本源として上古以來、日本人の思想と生活に多大の影響を與へた天文曆法と陰陽五行説の現代的批判である。著者の言に曰く、「陰陽五行説は天文學者の理論であつて、同時に又哲學であり、物理學である。この理論は更に又神學、道德學、政治學の原理ともなつてゐる。占星術もまたこの理論によつて組織せられ、曆法の上にも適用せられて居る。陰陽五行説は實に支那上古に於ける總ての學術の本源を爲すものである。故に陰陽五行説を検討することによつて、支那古代思想をば始めて明かにすることが出来るのである」と。その内容次の通りである。

一、支那古代の暦法、二、天文学から見た支那の古代文化、三、支那古暦の特色、四、支那の暦法、五、陰陽五行説、六、支那古代の天文学、七、古代支那の天文暦法及び五行思想、八、支那占星術の形式化、九、漢代の暦法より見たる左傳の偽作、十、再び左傳著作の時代を論ず。

本書と「支那古代史と天文学」とが、昭和十四年に出版せられた、邦文天文書の白眉である。

9. 舊約の天文学 本書はジ・スキヤパレリの原著を森川光郎の譯されたものである。舊約聖書と天文との関係を主題とせる著者は其の數に於いて極めて乏しい際、スキヤパレリの名著が邦譯されたことは時宜を得たもので、たゞに天文に好尚をもつ人々のみならず、舊約聖書の研究に志す人々にとつても亦本書は極めて貴重なる文献である。

10. 天文常識星の話 本書は大阪市立電気科學館天文部原口氏雄氏の著である。天文と趣味、恒星の世界、太陽系の世界、實用的な天文学、天象儀の五篇に分ち、趣味深く、平易に述べてある。著者に對し質問し且つ御参考に供したい點を次に掲げる。

4頁—刹那とは時間に於ける無限大の觀念を表すものとあるが如何？12頁—一目でもその顔を見たものは刹那に石と化し云々。刹那の意は後の方がよいのでせう？シリウス迄の距離—19頁は約9光年、23頁には約10光年とあるが前者の方がよい。23頁—ベテルギウス星の直径は太陽の400倍で、容積は太陽の約5000萬倍とあるが $400^3 = 6400$ 萬である。28頁—口径250糎の大反射望遠鏡で約9億の星が見えるとあるが、1億位と聞いてゐる。同頁—全天星の數約20億とあるが、これは昔の話で、山本博士の説によれば輝星、暗星と合し約3000億である。33頁—新星は突然急激に光を増し、後文消え去つてゆくものとあるが、減光した儘で永く視界に入るものである。34頁—大熊座β星が變星とは？……β星の誤りではないか？45頁—散開星圖は約250、球状星圖約90とは何人の調査によるものか？55頁—天文單位14939萬軒とあるが、米國曆には149504201 kmとなつて居り普通14950萬軒で取扱はれて居る。56頁—太陽の直径は赤道で測つたのより兩極間で測つた方が少し長いとは出所如何？筆者は完全な球の様に聞いて居る。63頁—「遊星の總數は9個となつた。更に此外にもまだあるかも判らないが、今の處發見されて居ない」とあつて小遊星に言及されて居ないのは何故？71頁—「望遠鏡で此の金星を望むと、銀色の三日月形のものが見える……」この文では常に三日月形にのみ見えるといふことにとれるが、金星は月と同様に盈虧があるのである。72頁—「火星のことをアズと呼ぶ」……アはマの誤植である。75頁—木星の「衛星現在では九ツ發見されて居る」……自序には「1938年の如きは、今まで九ツとされて居た木星の衛星が、ウキルソン山天文

臺のニコルソン博士に依り、新に二個発見された」と承知されながら九ツとしてある。これは無論11に訂正さるべきである。77頁—天王星は肉眼で見えないとあるが、時には肉眼でも見えることがある。78頁—衛星表中木星の衛星2個を追加すべきこと。82頁—「曆は最初、何處の國でも月の變化によつて作られたものであるとあるが例外が一つある、それはエジプトである。91頁—南十字が「將來何十年かの後には再び見えることになる」歳差の關係で南十字が再び内地から見える時が来ることは明かであるが、何十年かの後には未だ見えない。94頁—皆既日食の時には「地上は暗夜の如くなる」とあるが、それ程暗くはならない。94頁—皆既月食の時に「一時月は正體を失つてしまふ」とあるが、皆既月食の際は。銅色の月が朧ろに見えるものである。94頁—「月はこの地球の周りに廻轉してゐるもので、その一周轉は約二十九日半であり……」朔望月の二十九日半でなく、恒星月の約二十七日三分の一の方がよい。102頁—ハレイ彗星の「尾が40度にも達した」とあるが、筆者が曉東天に現はれた尾は天頂を越えて西天に及び140°にも達したのを見た。105頁—新しく発見された小遊星や新星には彗星発見者と同様発見者の名前が冠せらるとあるが、新発見の小遊星や新星全部とは行かない様だ。107頁—ハレイ彗星の尾20度に達するとあるが、最長の時は前記の様に100度以上であつた。120頁—明石町を明石市に訂正のこと。

11. 宇宙の實相 ウェルソン山天文臺 E. ハッブル原著、相田八之助譯の本書は1936年の秋、オックスフォードに於て、總題を「宇宙の實相」として試みられたロイデス記念講演である。本書は第一章觀測領域を宇宙の模型と見て、第二章赤色變位の意味に就いて、第三章可能なる宇宙の姿、觀測の結果に大別して述べてある。

12. 新裝版星座カード 初版に於て星圖と解説書とは別であつたものを、一葉に納めた爲め便利よく、定價を引下げられた事は普及上に喜ばしい事である。初學者は是非座右に備へるべきである。星座圖に日本内地の地平線があるのは目標があつてよい。

會員各位より“天界”の原稿を歓迎す

投稿規定は

1. ひだり横書きとすること。
2. 本誌1ページは、35字づめ、35行であるから、適當なる原稿用紙を用ひ、なるべく編輯に便利なるやうに、書くこと。
3. 別刷を入用とする人は、あらかじめ其の部數を、編輯係に申し込むこと。但し、之れは、實費を本會會計へ申し受けます。
4. 原稿メ切は毎月末。
5. 本誌の編輯事務所は、京都市上京區平野宮北町52 山本方。